

二〇一四年八月一九日(参加者二三名)

坂がかる陶器の町や秋暑し	ひかり
堆き浜の芥は出水跡	"
風さやか高原の上の美術館	"
茶畑は山のなぞへや霧走る	"
残照の空どこまでも土手涼し	"
全開す広き方丈涼新た	ぼんこ
稲妻の山も裂けよと閃めきぬ	"
磊磊に堰かれてしづく秋出水	"
身にしむや外人捕虜の欠けし墓	"
高原の四方は漆黒星月夜	わかば
連山の影屏風立つ星月夜	"
風さやか遊行のオール重くとも	"
うち仰ぐ樹齡千年蝉しぐれ	よし子
つつついてみたき誘惑蟻地獄	"
灯点せば水瓜提灯大笑ひ	"
秋の蝶樹間隠れに消えにけり	宏 虎
枯蟪螂落武者然と構へけり	"
清流にかがめば谿の秋の声	せいじ

墓地の四圍広がる稲の稔りかな	"
爽かや風に高鳴る堰の音	菜々
蓮池の亭はさながら浮見堂	"
小鳥来るおしゃべりの輪のひろがりて	有 香
老公の御手植といふ樹下涼し	小 袖
御手洗の柄杓につたふ水涼し	よう子
川蜻蛉上を下へとホバリング	満 天
秋暑し貨物列車はまだ続く	"
一陣の風に大袈裟蓮浮葉	"

定例会の選

二〇一四年八月一九日(参加者二三名)